

挺也、高誘注呂氏春秋云、蒨草挺出也、本草蠶實一名蒨實、其作蠶者假借字也、張揖注子虛賦謂之馬蒨、蒨蘭一聲之轉、馬蒨亦馬蒨之假借、圖經云、北人訛呼爲馬棟子、圖經又云、葉似薤而長、厚三月開紫碧花、五月結實、作角子、如麻大、而赤色、有稜、根細長、通黃色、人取以爲刷、時珍曰、蠶草生荒野中、就地叢生、一本二三十莖、苗高三四尺、葉中抽莖、開花結實、按是草皇國不產、享保以來有漢種繁殖、今俗呼唐蘭、或呼禰治阿也、米用其根、作刷、印刷、刻本、具呼馬棟、其加岐豆波太、亦是草之一種、無別可充漢名、則輔仁所訓非誤也、後人以杜若充之、杜若山薑、其說固謬、不足辨、近人以燕子花充之、燕子花出蠻溪、叢笑、其草蔓生、不得充加岐豆波太、不如輔仁以馬蒨充之之不遠也、

〔下學集〕草木 杜若

〔和爾雅〕草木 燕子花漳州府志云、溪蠻叢笑云、紫花全類、燕子、一枝數葩、漳人名爲紫燕、

〔日本釋名〕草木 燕子花、かきはかけり也、けりの反し、ハキ也、つばハつばめ也、めを略す、たは立也、此

花のかたちバ、かけるつばめの、はねをひろげながら、まばらく物にとまりて立にたり、かけるつばめたつ也、つばめににたる故、からの書にも燕子花と云、

〔東雅〕草卉 劇草カキツバタ略 中 萬葉集には、垣旗また垣津幡などの字を用ひて、カキツバタと

云ひけり、後の人また杜若の字、讀てカキツバタといふなり、即今俗にバリンといひ、カキツバタ

といふ者は、相似て同じからず、今いふ所のバリンは、即馬蒨也、カキツバタは、即今紫羅欄、俗名牆頭草、一名は高良薑といふ是也、カキツバタといひしは、其花の垣下にさきたつるをいひし名と

こそ聞ゆれ、本草圖經に據るに、馬蒨は葉似薤而長、厚三月開紫碧花、五月結實、作角子、江東頗多、庭階呼爲早蒲、と見えたり、補筆談通雅等の書に據るに、杜若即高良薑也、楚地山中時有之、大者曰高良薑、細者爲杜若、唐時陝州貢之、見えたり、また花鏡には、紫羅欄、俗名牆頭草、一名高良薑、葉似蝴蝶、而更潤嫩、四月中發花、青蓮色、葉瓣亦類蝴蝶、大而起臺、紫翠奪目、可愛、と見えたり、彼はを併せ見れば、我國の古にありては、今の如くにカキツバタ、バリンなど分ちいふも及ばず、すべてカキツバタと云ひしを、倭名鈔には、馬蒨をもてカキツバタ、バリンなど分ちいふに

杜若をもて、カキツバタといひしに、因りて、後に倭名鈔に、高良薑、紫羅欄、一名高良薑などいふの、説に依らむに、我が國に